

【月光を継ぐもの】

月影(つきかげ)
青十郎(せいじゅうろう)
紅葉(くれは)
綾姫(あやひめ)
衣伏(いふき)
緋炎(ひえん)
楓(かえで)
影 5人

1

幕開け前。真つ暗な中、親子の会話が聞こえる。

娘　ねえ、お母さん。
母　何。
娘　寝る前に何かお話し。

母　ううわよ。何か絵本持ってくる。
娘　ううん。初めて聞くお話がう。
母　初めて。
娘　だって他のお話は飽きちゃったんだもん。
母　と、言われてもすぐ出来るお話なんて……あ。
娘　何かある。
母　あるにはあるけど、寝る前に聞くようなお話じゃならね。
娘　どうして。
母　ううん、悲しいお話なの。
娘　悲しいお話……。
母　ううん、でも深く悲しいお話。……やめる。
娘　ううん。そのお話が聞きたーい。
母　そっ。じゃあ……何から話せばいいかしら。これはね、自分の信念を貫くために自分の存在を賭けた、3人の男の人のお話……。

2

音楽。幕が上がる。舞台は真つ暗。

曲の盛り上がりと同時に明かりがつく。月影と青十郎と紅葉が剣を交えている。

紅葉 戯れ言を言つな……。弱き者の気持ちちが貴様等に分かるというのか。

月影 皮肉なもんでな。弱き者の気持ちちはア、ンタが教えてくれたも。

青十郎 だからこそ俺達は強くなると思つた。痛みや苦しみを飲みこんで、さらに前へ進むと思つたのだ。

月影 死からは何も生まれな。俺達は生きてるんだ。生きてりゃ辛いことつやあるだろ、だがな、辛いことだけじゃな。嬉しいことや楽しいことつやある。

青十郎 可能性を潰して前を見なくなつた貴様に俺達が負けるわけがな。だろ。

3人、半周して離れる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。
相対し、3人再度構える。3人の雄叫び。
曲の盛り上がりと同時に暗転。紅葉は下手くはける。
月影は下手側へ、青十郎は上手側へ移動。
青十郎の台詞の途中で明かりがつく。

青十郎 だから俺は貴様が嫌なんだ。

月影 どの位のことで目くら立てるなも、小つちえー男だな。

青十郎 原因を作つた貴様に言われたくないわ。

月影 あんなとくにいつまでも置いとくア、ンタが悪いんだろーが。

青十郎 おーおー、言つて口から俺が悪いときだか。流石身分の低い人間は知識も知能も低いな。

月影 ア、ンタは何かつーとそれだな。身分つて粹でしか他人を見れないのかも。

青十郎 問題のすり替えか。今話しているのはそつらつことじゃな。だろ。

月影 つついな。だから皆から小つちえーつと言われるんだも。

青十郎 皆つて誰だ。

月影 皆は皆だよ。

青十郎 には姫と楓殿と俺達しか。な。だろ。

月影 だから、皆だよ。

青十郎 姫や楓殿が言っているのか。

月影 小つちえーつ。

青十郎 嘘をつくな。貴様、そくなおれ。叩き斬ってくれる。

月影 やるつてのか。手加減しな。ぞ。

二人、刀を抜き、相手へ走り出そつとしたとき、楓が入ってくる。

楓 お止め下ろし二人とも。どつたんです。

月影 楓殿、コイツがからんでくるんです。

青十郎 原因を作つたのは貴様だろつが。

月影 そこのガキだつてもこと語ぬらうぞ。
 青十郎 だ、か、ら、貴様が言ったな..
 楓 お止め下さい。青十郎様、どうなさつたんですか。
 青十郎 まんじゆつだ。
 楓 はい。
 青十郎 俺が訓練後に食ふものと思つてしたまんじゆつをコヤツが食つたんだ..
 楓 まんじゆつ。
 月影 2個な、2個。
 青十郎 まんじゆつは3個しかなかったんだ。そんなわけで、3つに人の道を説つてしたとらうわけです。
 楓 (ホハハ)コヤツ、小っちゃい。
 月影 なつ? なつ?
 青十郎 楓殿..
 楓 まあ、良いではありませんか。月影様も全部食つてしまつたわけでは、ありません。お腹がすいてたのぢやない。
 青十郎 姫や楓殿がそこやつて甘やかすからいけななんです。忍のよつな身分の低し連中は厳しく躰けなくは..
 楓 青十郎様。姫様はそのよつな物言ひ、お好きではありません。
 青十郎 しかし..

5

月影 分かつた、分かつた、そんなに言つたら戻してやる。だから楓殿にあたるな。秘儀、忍法、食く戻しの術..

月影、青十郎の服にめかけて

月影 Hハハハハ..
 青十郎 それは忍法じゃならだろつ。二三日まで侮辱されたとおつては後く引けん。貴様、覚悟..

青十郎、再び刀を抜く。それに合わせて月影も抜く。

楓 お止め下さい。今日は姫様が封印の間に入つて30日目。出ていられる日なのですよ..

二人、その言葉を聞いて刀を鞘に収めながら

青十郎 おお、そつであつた。
 月影 もうすぐ出てくる時間だよな。青十郎、今何時か分かるか。
 青十郎 軽々しく人の名前を呼び捨てにするな..
 月影 ……ア、アタは真面目だねえ……。

6

青十郎 貴様からせけすきなだけだ。
楓 いら加減にしてくだされーんとも。

中割が開いて、綾姫がころころと入ってくる。綾姫はトコハス状態になっている。

楓 ああ、姫が出てまいました。私、冷たなおしほりを持っています。青十郎様、月影様、しばらく姫様をお願い致します。

楓、上手く走り去る。

青十郎、姫に近付き手を出そうとするが、恐れ多くて姫を支えることができない。

姫、ころころとさあ歩前進し、大きくトコハスを崩す。

走り寄り抱きとめる月影。それを見た青十郎、月影の手をつねりながら

青十郎 貴様ー、忍の分際で姫のお体に触れるとは何事か、

月影 ころころとトコハスーも、

青十郎 主君に仕える身として、それ位のことばわきまえておけ、

月影 そんなこと言っただけのおもちゃや怪我してただろ、ころころか、痛ーころころーの、

青十郎 貴様からつまでも姫に触れているからだ。

月影 分かったよ。離しやーんだろ、離しや。

月影、姫を離す。再びころころとする姫。

月影 どーすんだよ、支えなると危なげぞ。

姫、大きくトコハスを崩す。とつちに片手が出てしまう青十郎。

青十郎 申し訳しやしません姫、この青十郎、決してやまじい気持ちでお体に触れているわけでは、
ません、ころころか、ころころか、容赦の程を、

月影 青十郎、ころころの時は必死に言い訳すればする程、怪しまれるぞ。

青十郎 やかまじい、本来なら我々など決して触れてはならぬお方なのだ、しかし、危なげものを尻廻
しすことは出来ぬのも事実、しかし手は触れてはならぬのだ、くっ、ころころすれば、ころころ
はぬのだ、い、い、そのか、手は触れてはならぬ、ならぬ、い、い、い、

青十郎、手を離し、片足で姫を支える。

月影 お前、絶対間違っているだろ、

青十郎 やかましう、均衡がとりにくうんだ、貴様も協力しろ、
月影 ……足でか、
青十郎 手で触れることは許さん、
月影 アゝ々の作法の基準がわからない……。

月影、片足で姫を支える。苦しそうな姫。

青十郎 姫、どつしました姫、
綾姫 ……座りだい。
青十郎 分かりました、座って休みたうのですね、おら、じいか、ゆっくりだぞ、
月影 セーので、動くか。
月・青 セーの……。

二人、呼吸を合わせて座るごうとした時楓が入ってくる。

楓 何してるんですか、

二人、驚いて支えていた足を離してしまふ。崩れる綾姫。

楓 姫様、姫様、大丈夫ですか、……せ、これを。

楓、冷たいおしほりで姫の顔を拭いてやる。同時に飲み物を渡す。一息つく綾姫。

綾姫 じ苦勞様です。楓、青十郎、月影、変わりはありませんか、
楓 はい。皆変わらず元気です。
綾姫 そうですか、それは何よりです。
楓 姫様、我々の心配よりも御自身の事をお考えになつてくださう。
綾姫 私は大丈夫。いつものことですもの。

青十郎、綾姫の近くまで歩み寄り、ポーズを決める。

青十郎 姫、お役目お疲れ様でございます。
綾姫 青十郎、変わらず律儀ですね。
青十郎 私は姫を守る為にここに居るのです。しかし、それは義理で行っているわけではありません。私は今この場にいられることを誇りに思っているのです。おら、貴様も姫に忠誠の誓いをたてろ。
月影 俺が、

青十郎 たまには貴様にもそれらしいことを教えてやらんとせ。しかし、この姿勢は三葉の国、君主に仕える忠誠の証だ。本来なら忍なんて身分の低いやつに教えることではないんだが、現状は姫に直接仕えているんだ。そろそろ最低限度の礼儀として教えてやる。

綾姫 青十郎。

青十郎 姫、これだけは譲れません。忍とは本来誰にも会つことなく任務を全うする影の集団。姫と直接顔を合わせるなどないことなのでござります。三葉の国は事情が事情ですので致し方ないとして、であれば尚更、コソコソには礼節を教え込まねば。

月影 言つておくが俺はそんな形だけの忠誠なんて誓つ気はないぞ。

青十郎 なんだと。

月影 そうだろ。そんな姿勢をしたところで本心は分からぬ。じつと決めた心の中で舌を出してらるのなら意味はないだろ。

青十郎 舌を出してるだろ。

月影 あんたの話じゃなし。良くも悪くもアノタはもう真面目だからな。取る行動に嘘はない。それ位俺だって分かってる。ただ、俺は忍だからな、いろんな人間のいろんな顔を知ってるだけだ。

青十郎 お前の気持ちに嘘偽りがなければならぬ問題ないだろ。

月影 嘘偽りがなければ、知らないやつが作った決まり事に気持ちを乗っけるのが嫌だと言ってるんだ。

青十郎 貴様――。

月影 俺にはアノタの行動の方が理解できぬ。その姿勢を取ることにどんな意味を見いだせるんだも。意味など必要なし。これが決まりなんだ。「命をかけて姫を守ります」といつ証なんだ――。

青十郎 決まりだとか証だとか、たまにアノタ矛盾したと言つよな。他人の作った制度に合わせるのか、自分の気持ちに従つのか、ぐちゃり定まつてないんだろ。轉がっつろいじゃならぬ。

月影 貴様にそこまでの覚悟がなければならぬ。

青十郎 俺にだって姫をこの為なら命をかける覚悟はある――。

月影 忠誠も示せぬ奴がほぞくな――。

綾姫 だから、示すことと実行することは別だつて話だろつが――。

月影 やめなせろ人共――。

姫の肩にぐちゃりおつて月影と青十郎。

綾姫 言い争ひは見たくも聞きたくもありません。自分の思ひを言うことは良いんですが、相手の否定するというのが前提ではその先に発展はないでしょう。それに……

月・青 はっ――。

綾姫 軽々しく「命をかけて」など誓つてほしくはありません。命をかけるというのは、そんな簡単なことではないのです。役目についている私達と姫に責任と預け出したら気持ちの間で戦っているのですよ。

青十郎 申し訳ありませんでした。

月影 ……申し訳ありませんでした。

綾姫 何より……そなた達の先に私の命があるなどとは思っていません。私は天命に従います。

月影 姫さん、選つ、それは選つ。

青十郎 貴様、姫に意見する気が、忍の分際で、

月影 だつてそつたらあ、あんだだつてそつ思つたらあ、守るつもりしてる相手が自分の命が俺達より軽いなんて考えてみる、守れるものも守り切れないうつが、姫さんには自分の命の重さを認識してもらわなきゃ、つちがやつたらなうたら、

青十郎 姫の御心も分からず貴様は、

綾姫 良し、……分かりました。私は私の命を今よりも大切に扱つていよう。ただし、約束なさい。そなた達も決して命を粗末にしなう。極限まで足掻くだけ足掻く。

月影 ……はう。約束致します。

青十郎 もつたいなきお言葉。勿論約束いたします。

楓 さて、話もまとまつたことですし「小さな宴会」を始めますが。

綾姫 そつですね。封印の間に入つて、日、それがすつと楽しみでした。

楓 今夜は御馳走です。姫様の好物をたくさん用意しております。

4人で上手へ移動しようとした時、上手、下手から影が現れる(理應は5〜6人)

青十郎 コイツらまたか、

月影 ぐしゃぐしゃと、どこから湧いて出やがった。

刀を抜く二人。影と対峙する。

月影 青十郎、油断するなよ、

青十郎 貴様に言われたくならわ、姫を守れ、

二人、影と切り合いをしつつ姫を守る。殺陣をしつつ下手に月影・青十郎・綾姫が移動する。セクターに影選。相対する。上手に残される楓。

青十郎 姫、無事ですか、

綾姫 ええ、私は大丈夫です。でも、

月影 ん、なんか忘れてる気がする。

シー、とした間。影選、一斉に上手の楓を見る。

楓　ちよつと、
 月影　青十郎何やってんだ、楓殿はア、女の方が近かったろ、
 青十郎　俺の役目は姫の護衛だ、姫の無事を最優先する、
 月影　姫さんの笑った顔が最優先だろつが、

月影、影達へ斬りかかる。分散する影。影達、月影へ襲いかかる。必死に戦う月影。
 後ろからの攻撃に左腕を斬られる月影。体勢を崩す。

綾姫　青十郎、行きなせう、
 青十郎　しかし、
 綾姫　行きなせう、

綾姫の命令に影達へ突進する青十郎。月影も体制を整え参戦。
 一気に影達を斬る月影と青十郎。斬られた影はスーッと上手く消えていく。

月影　何なんだあいつら。……最近襲ってくる回数が増えたんじゃないか。
 青十郎　人ならざるあやかしか……。タチが悪いな。
 月影　タチが悪いのはア、女の偏った使命感だ。何で楓殿を守らなかつた。

青十郎　俺の役目は姫を守る、
 月影　守れるなら目の前にいる全てを殺せばいいだろ。
 青十郎　それで方が、一が起きたとしたら、いつする。武士とは使命を全うする者、
 月影　楓殿が死んだら姫さんは泣いて生きる、
 青十郎　楓殿も含め姫も俺も弱くはない。貴様とは覚悟が違つんだ、
 月影　俺の覚悟が甘いと言っても言つのか、
 楓　月影様。
 月影　楓殿。
 楓　助けて頂いたのは本当にありがとうございました。ですが、今回だけは青十郎様のおつしやる通りです。この場にいる以上は私の命など無しもとの思つておます。
 月影　生きようとする努力はすぐきじゃないのですか。
 楓　そうですね。でも、それでも正しいのは青十郎様です。
 月影　楓殿、
 楓　姫さまがこの世の全ての人の命を預かっている、
 月影　それは違つ。姫さんが特別なだけだ。それを、
 青十郎　だから、それを覚悟の差だと言つたんだ。

綾姫　もうよい。青十郎の覚悟も月影の思ひもよく分かりました。ありがとうございました。もう一度眠ります。です
すから、ここに居られる少しの間だけは、楽しく過ごしたい。それが私の願いです。

青十郎　姫の前で失礼いたしました。

綾姫　月影、近くに。

月影　え、あ、はい。

月影、綾姫の近くに移動。

綾姫　怪我は大丈夫ですか。

月影　別に、少し切ただくらいなんで……にれくらは……。

綾姫　身を呈して櫃を守ってくれたこと、れを言います。

綾姫、持っていた手ぬぐいで月影の腕の傷を止血してやる。

青十郎　姫、何を。

綾姫　傷の手当てくらい私でも出来ます。櫃、手拭いをもち　い。

楓　かしこまりました。

楓、上手く去る。

青十郎　姫、コイツの血は危険です。こいつは鬼との間に生まれた子ですよ。その血どんな呪いが掛けられてるか。

綾姫　青十郎。私はそのような考え方を好みません。口を慎みなさい。

青十郎　しかし鬼との子であることは事実です。鬼は醜く汚れた存在のあやかしなのですよ。

綾姫　青十郎、……鬼がそのような存在であると誰が決めたのですか。

青十郎　それは。

綾姫　人ならざる力を持てばあやかしですか。ならば私もあやかしといつていいになります。私も醜く汚れた存在といつていいです。

青十郎　何をおっしゃいます。私はそのようなつもりで言ったわけではございません。

綾姫　制度や秩序、身分を大切にする考えは素晴らしいことです。しかし、それだけでは本当に大切なことも見落としてしまいます。

青十郎　姫、。

綾姫　もうよい、下がちなさい。

青十郎　私は……。

綾姫　青十郎。

青十郎　……はつ。何かいざなったらお呼び下さい。

青十郎、複雑な表情で上手く去っていく。すれ違いで楓が入ってくる。新しい手ぬぐいを姫に渡す。

綾姫 月影……。青十郎のこと、悪く思わなうでござい。

月影 いや、俺は気にしてなんです、本当。アツは真つすくな奴ですから。あいつの言葉に嘘はない。

綾姫 では何故……。

月影 違つんです。アツは自分の心の中にある気持ちに気付いていただけです。いそいそ頃から嫌つてのは本当にやつかうで……。時々俺達を苦しめます。でも青十郎は嘘なく俺としゃべっているんです。本当に醜く汚れた存在だと思っているなら俺なんて無視すればいい。でも、アツは嘘なく俺としゃべるんです。

綾姫 そうですか……。

月影 俺の方です。

綾姫 え？

月影 向き合えてなのはきっと俺の方です。

綾姫 月影が？

月影 恐の里つていつかは嘘だらけです。誰も本当のことを言いません。親も子も友達も恋人も本心を隠して生きています。相手の嘘から本心を読めなり恐は上くは行けません。俺は嘘の中で育ってきたんです。だから、青十郎のように素の顔の言葉をぶつけられるん、いついつしか分からなう

19

時があります。本当の意味で向き合えていなのは、きっと俺の方です……。

綾姫 ……そうですか……。

月影 俺も青十郎もいついつ性格ですからね、分かりあえる日は来なうかもしれないですけど。

楓 そんなことありません。お二人は立派な武士であり、立派な忍です。お二人が力を合わせれば、三葉の国に怖うものなうありません。

綾姫 さて、暗うお話は二時までにして、明るく行きましよう。私は今日、一日を楽しまだうと思つておす。「小さな宴会」の準備は出来てますか？

楓 もちろんです。

綾姫 月影、新ネタは？

月影 べつちりです。

綾姫 基本的には楽しみにしてりますよ。

月影 何すか、基本的に？

綾姫 楓、あなたの役目も今日で最後ですね、いそお様でした。いんな何もなら辺境の地に。日間も、さぞ辛かつたと思つます。

楓 いいぞ。いいぞ、いいんです。本当はもっと姫様といたらんです。日なんて決めいかなければ私はずっとここに居るつもりです。

綾姫 楓は変わった人ですね。普通ならいんな所、一分一秒でもいたくならでしよう。日の取り決めはお付きの人の為にあるのですよ。

20

楓 　でも、でも姫様はずっとここにおられるじゃなうですか。
綾姫 有難う。楓は優しいですね。この日はあなたの笑顔のおかげで前えられました。
楓 　もつたなら言葉でいえます。
綾姫 だからさ、今日は代わりのお付きの者と共に楽しみたうと思っております。楓の作る料理は何でもおいしうですからね。
楓 　姫様のお好きなものはかりです。
月影 　でも、代わりのお付き役、来るの遅いんですね。もつ着いてもおかしくなればなうでせう。
楓 　そつうではそつですなえ……。

下手より緋炎と衣伏が入ってくる。

緋炎 兄者、

緋炎、走つて月影にしゃべつて抱きつへ。

月影 緋炎、お前どつて。

緋炎 俺がお付き役の案内を任されたんだ。

月影 お前が、変わりの者はいなかったのか。

緋炎 それが……。

楓 あら、あなたは。

衣伏 衣伏と申します。

楓 お付き役ですか。

衣伏 はい。

楓 でも、私の次はナツメさんのはずでは。

衣伏 ナツメさんは……亡くなりました。

楓 亡くなつた。

緋炎 兄者、今、城内も忍の里も死人が増えてる。誰の仕業なのか分からなうけど、何かが起きてるの
は確かだと思つて。

月影 忍の里もやられてるのか。

緋炎 だから今、守りを固めるために人はちけなうてんで、案内役が俺に回つて来たつてわけだ。

月影 よく無事に來れたな。

緋炎 別に、特に何もなかつたですもんね。

衣伏 ええ。……姫様、そついつ派ですので明日からの日は私、衣伏がお付き役をやらせていただきます。何なりとも申し付け下さい。

綾姫 そつですか、こつ苦勞様です。よろしく頼みますよ。

衣伏 はい。

月影 ほら、緋炎。お前も姫さんに挨拶しとけ。

緋炎 俺が？

月影 そのくらいの礼儀、里でも習ったろ。姫さん、コイツ、俺の弟分で、緋炎ってしゅんです。ちつき里は嘘ばかりだって話まじだけど、コイツだけは別だと思ひます。

綾姫 そうですか。緋炎、よろしく頼みますね。

緋炎 ……はあ……。

月影 おい「はあ」じゃならだろ。姫さんが話しかけれくれたんだ、ちゃんと返事ぐらひしろよ。

緋炎 だって綾姫様だろ？ 城が大変な時にほつぽり出して遊びまわってるって噂聞してるんだ、「姫様だからって何しても許されるわけじゃならだろ？」

月影 噂って、緋炎、お前長から何も聞いてならのか？

緋炎 え？ 何が？

楓 もしかして衣伏さんも？

衣伏 ええ。何分急だったもので詳しいいとは何も。

月影 まあ一回っつて話して秘密がべしるよりは、こっちで事情を話した方が賢明かもしれなけえな……。

緋炎 ……秘密って？

月影 ああ……後で話してやるよ。とりあえず長旅で疲れたろ？ 今日は姫さんもうる。「小さな宴会」だ。

綾姫 楽しみです。

全員、せうターで半田になる。月影、真ん中に入る。

月影 「小さな宴会」恒例、月影の爆発時間、「己の肉体のみを使い、瞬間芸で見る者を笑わせる秘儀」、俺はこれを「一発キヤク」と名付けた。

全員 「一発キヤク」。

月影 前はは、引き、失笑の繰り返して「無かつた事」になつてしまつたが、我、今こゝに復讐を誓つ、

緋炎 何だか分かんないけど格好いい。

月影 それではいきます。「月影がお送りする「一発キヤク」、まずは「一発目」。

月影、一発キヤクをやる。(以後、つけるつけならに關係なくやる)

楓 からの。

月影 からの？

全員 からの。

月影 からの〜……。

月影、二発目をやる。

楓 ちらり、
 月影 ちらり、
 全員 ちらり、
 月影 ちらり……。――

月影、三発目をやる。

綾姫 楓、今の笑い所を説明してちょうだい。
 月影 笑いに關しては蔽しすぎるだろ、
 楓 無かった事にしよう。
 月影 アゝ女には優しさがなうのか、
 緋炎 大丈夫、兄者は今のが面白うて照つただけだよな。
 月影 お前は優しさを履き違えてる。
 衣伏 私は、あの……あの、その……。

衣伏、何か言おうとするが、言葉が出て来ず、素に戻る。

月影 何もしなかま、
 綾姫 月影。
 月影 はい。
 綾姫 二発目は。
 全員 姫様、――

青十郎が入ってくる。周りを見渡して、月影と目が合う。

青十郎 ……ズグったのか。
 月影 アゝ女は武士の情けをどこかに落としてきたのか。
 緋炎 なあ、兄者。俺にはやつぱり遊びほつてゐるようじしか見えなうんだが。
 月影 今日だけ見ればな。
 緋炎 ……なんだよそれ。
 月影 緋炎、お前も里で習つたら、この世界にはあの世とこの世を行き来できる門があるって。
 緋炎 地獄門の、とか。
 月影 ああ。行き来できるというてもこの世の人間があの世に行く、とは考えられない。門が使われるとすればあの世の主が、いつかに来る時だろうな。
 青十郎 しかも大抵タチの悪い亡霊らしい。生きてる人間にうつりて殺してしまつてんだ。

月影 だからその門が使用されないうちに誰かが見張ってる必要がある。

青十郎 見張るだけじゃない。門そのものを封印しなくてはならなんだ。

緋炎 ……で？

月影 その門がこの国、三葉にあつたとしたら、三葉の血族は門を封じるための霊能力を持っていたとしたら？

緋炎 え、じゃあ？

青十郎 綾姫は霊能力を持って生まれた。封じる者としてのお役目を立派に遂行なさっている。

月影 この岩の向こうに門があつた。門の前で姫さんはずっと祈りをささげている。ずっと仕組まれているのかは分かんが、この岩は一度閉じると次に開くまで30日かかる。

緋炎 30日？

青十郎 だから30日間祈りをささげた後、一日だけこつて一時を過ぎ、再び祈りをささげる為に中へ入るわけだ。それを姫は12の頃から続けている。

緋炎 そんな、だつて12ついたら遊びたう盛りだろ？なんで姫様だけが、

月影 言葉通りぞ。姫さんだけが、霊能力を持っていた。だからだ。

緋炎 姫様、

緋炎、綾姫の前で土下座する。

緋炎 姫様すいませんでした、俺、そんなことも知らなくて、噂だけ信じて失礼な、とってしまったました、どうか、どうか許して下さい、

綾姫 ……顔をあげなさい、緋炎。

緋炎 でも、……。

月影 緋炎。

緋炎、ゆつくり顔を上げる。

綾姫 知らなかったことを責めるのは愚か者のすることです。何より、あなたは私の為に心を痛めてくれた。嬉しく思います。これでまた一人、守りたいと思う人が増えました。それが私の力になるのです。

緋炎 姫様、俺、今は全然弱くて力になれなうですけど、強くなります。強くなつて必ず姫様を守ります。

綾姫 ……頼りにしていますよ。

緋炎 はい、

青十郎 ただ分かっていると思つが、くれぐれも内密に。

緋炎 分かりました。……でも、そんなに大切な場所ならもこと多くの人間で守つた方がいゝんじゃないですか？

月影 バーカ。こんな辺鄙な場所に大勢の兵士がいてみる。「何かありますよ」って言ってるよつなもん
 だろ。
 楓 だから城から一人。忍の里から一人。一番強いものがこつて姫の護衛についでいるといつわけ
 です。
 緋炎 なるほど。
 月影 理解したか？なら、姫さんの為にも強くならなまやな。
 緋炎 ああ、頑張る。強くなつて、今度来るときは姫様の護衛としてだ。
 綾姫 楽しみにしています。
 楓 さて、姫様もお疲れでしょう。衣伏さんも、少し休まれては。
 綾姫 そうですね。そうしましょう。
 楓 ではこれを。

楓、上手に布団を取りに行きすぐ戻ってくる。姫に赤い色の掛け布団を渡す。
 他には黒い布を渡す。

青十郎 (衣伏に)「このあたり 一番は俺とコイツで守ります。安心して休んでください。姫、良き眠りを。
 綾姫 有難う。

月影・青十郎・緋炎を残して全員上手へ。
 月影は舞台の客席側を、青十郎は舞台の裏側を見回る。

緋炎 冗者。
 月影 どうした、寝ないのか？
 緋炎 せつかく久しぶりに冗者に会えたのに寝るなんてもったいなかった。
 月影 ……気持ちの悪いやつだな。
 緋炎 ひ、ひでえ……。
 月影 あ、そうだ。お前さっき城でも里でも死人が増えているって言ってたな？あれ、どつらう意味だ。
 緋炎 いや、俺も詳しいとは分らないんだけど、とにかくいろんな人間が死んでるんだ。
 青十郎 殿は無事なのか？
 緋炎 え、あ、はい。
 青十郎 ……そつか。
 月影 いろんな人間って……何か特徴はないのか？
 緋炎 いや、本当にいろいろで……年齢も性別も職業もいろいろ。共通点があるとするれば……殺された
 人は里や城から出ていた人ってことかな。
 月影 里で忍を殺せば自殺行為だからな。
 緋炎 うん……。でも殺しまわってる奴は相当手練れだと思つ。

月影 どうして？
 緋炎 上忍まで殺られてるんだ。
 月影 上忍が？
 青十郎 ……上忍？
 月影 忍にも位があつたな。下忍・中忍・上忍。上忍ぐらゐになると、一人で他国の城へ侵入し、殿様を暗殺することだつて出来る。その上忍を越す力を持つてゐるとすると、かなり厄介な相手だな。
 青十郎 ……それはいつ頃からだ？
 緋炎 一ヶ月位前から……だと思ひます。
 青十郎 城内で対策は立ててゐないのか？
 緋炎 俺にはよく分からなうです。ただ長達が言つては、城のお偉いさんは他国の仕業なのか、謀反なのか、決め兼ねて話がまとまらなう。このよつな事態に対応する規律がなうからつて……。
 青十郎 何をやつておるのだ、お歴々は？
 月影 それで、里の長は何と言つてゐるんだ？
 緋炎 忍は君主を守るじや役目ではなう。上からの命令が無う以上、里の守りを堅める考えらう。
 月影 役目とかそんなじやないだわつてゐる場合じやないだろ、この大変な時期に……なあ、青十郎。
 青十郎 何だ？
 月影 そういへばあの影のよつなあやかしが現れたのも、一ヶ月位前からじやないか？
 青十郎 ……確かに……。城や忍の里で死人が増え、あやかしも増えてゐる。

青十郎、一人何かを考え込む。

緋炎 ねえ兄者。
 月影 ん？
 緋炎 青十郎様つて、昔の兄者に似てるな。
 月影 まあな。でも違つところもある。アイツは、
 青十郎 誰と誰が似てゐるだつて？
 月影 地獄耳だ。
 青十郎 貴様。今、俺とアイツが似てゐると言つたのか？
 緋炎 あ、いや、その。
 青十郎 なんかチヤウ・ホウでいゝ加減で無責任で…彼女ならい歴れ2年の男と、俺が似てゐるだつて？
 月影 お前、最後のは言つちやけならやつたら。
 緋炎 ですから、「昔の兄者」と似てゐると言つてゐるんです。
 青十郎 昔の？昔と今では違つのか？
 緋炎 かなり。……昔の兄者は忍の掟を第一に考える男でした。他人にも厳しかつたし、それ以上に自分にも厳しい人でした。
 青十郎 ……貴様が？

月影 なんだよ、信じられないうか。

青十郎 当たり前だ。

月影 まあ、昔の話だ。

青十郎 なぜ生き方を変えたか。

月影 今のアノタには言っても分からないかも知な。

青十郎 ……面白。話してくれ。聞いて判断しよう。

月影 やれやれ。……アノタも知ってる通り、俺は鬼との間に出来た子だ。行き先なんて決まってる。鬼世物小屋か、王山の中で隠れて暮らすか、あるいは忍になるか。俺は幸い長に拾ってもらったな。忍になることができた。でもまあ、ガキなんていつでもどこでも似たようなもんだろ。理解できないものには拒否反応を示す。じいめだよ。その頃の俺も、今だって、人間と何も変わりはないし33
のにな。

緋炎 むしろ兄者は誰よりも強くなったんだ。

月影 一人の人間として認めてもらう為にな。忍は実力主義だったから強くなりたかった。信用してもらいたかったから掟を何よりも重んじた。俺は異例の速さで上忍になることが出来た。

青十郎 素晴らしいうじゃないか。全ては掟、規律を守ったからだろ。

月影 青十郎、確かに規律は大切なものだ。それを否定するつもりはない。だが、規律に生きるのは駄目だ。規律に生きるという事は楽をするという事だ。大切なのは自分。青十郎、アノタ自身の気持ちなんだ。……それに気付いたのは緋炎、お前のおかげだったな。上忍になった俺は二人

の中忍を連れて、ある国の情勢を調べる為に偵察に出た。二人の動きもあって偵察はすぐに終わった。その帰り道、山の中で四人の人影とすれ違った。正体は付近の村人だったが、敵の忍と勘違いした一人の中忍が一人の男を斬ってしまったんだ。四人の人影は家族だった。父母娘と息子。その父親を斬ってしまった。母親は近くにいた娘の手を取り、悲鳴を上げながら逃げた。……忍の掟には「殺しを見た者は皆殺しにしろ」というものがあったな。もう一人の中忍がそれを守り、母と娘を斬った。俺の目の前には男の子が一人。状況を把握できずにただずんでいた。

青十郎 ……斬ったのか。

緋炎 斬ったら、今俺は二にしませんよ。

青十郎 貴様がその時の。

緋炎 はい。……兄者が斬ったのは中忍二人の方です。

青十郎 それは里への裏切りではないのか。

月影 まさしくそだよ青十郎。俺は緋炎を斬りたくなかった。俺は俺を裏切ることができなかった。

緋炎 掟は所詮、他人の作った規律。大切なのは自分の思い、そして判断。……そつだよな、兄者。

月影 ……俺を憎んではいらないのか。

緋炎 もう、その台詞何度目だよ。兄者には感謝してるって言ってるだろ。

青十郎 中忍二人を斬って置いて、よく里の長を騙せたもんだ。

月影 偵察の成果は上々だったからな。特に問題はなし。忍なんて中忍以下は使い捨ての駒みたいなも

青十郎 へんだ。
 月影 で、それが掟や規律に疑問を持ち始めたきつかけと一緒じゃ。
 緋炎 まあな。
 青十郎 里に帰ってからの兄者は徐々に掟と一緒からではなく、自分で考えて行動するものになった。
 月影 ……なぜ斬らなかったか。
 青十郎 アゝタが俺の立場だったらとっしてた。
 月影 俺は規律を守る。
 青十郎 青十郎は意外と自分で自分のことが分かっていらなな。
 月影 何だと。
 青十郎 ……アゝタに緋炎は斬れない。
 月影 俺には規律が絶対だ。
 青十郎 まあ、掟を大切にしていた昔の俺くんぬん抜きにして、心の根っこでは俺達は結構似ていると思ってるんだがな。
 月影 俺と貴様が根っこの部分で似ているだよ。冗談は顔だけにしてもらおうか。
 緋炎 例えば今の時間、丁度楓殿が水浴びをしている頃だ。覗きだしたら思ってた。
 青十郎 兄者、それは似ているとかの問題じゃなくて、男なら誰でもなぐじゃ……。
 月影 べか者!! 男子たるものそのような邪な行爲は断してするものではない!!

月影 あーそっかよ。じゃ、俺と緋炎だけで見ようか。
 青十郎 そんなことさせると思っつか。
 緋炎 って言いつながらにこっちに来たじゃんですね。分かります。
 月影 そっついつとじゃならだろっ。
 青十郎 なんだよ、こっちに来ならのか。
 月影 行かん!!
 緋炎 止めるんじゃないですか。
 青十郎 止めん!!
 月影 あーそつ。じゃ、緋炎、楓殿の水浴びをとくと見せてもらおうか。

青十郎、下手の方を向いて目を閉じる。
 月影と緋炎、最初は上手を向いて話すが、徐々に下手を向く。
 月影 おお!! 丁度良い頃だ!!
 緋炎 楓様!! す、凄じ!!
 月影 うっむ、眼福眼福。緋炎、よく目に焼き付けておけよ。
 緋炎 ああ!! 兄者、女体とはこんなにも神々しいものなのか!!
 月影 楓殿はまた格別!! 見る、あの餅のような肌を!!

緋炎 里のくの 全部を集めたって楓様にはかなわなうな _
月影 くの と比べる こと自体が楓殿に失礼だぞ _
緋炎 確かに _

青十郎、我慢しきれなくなつて上手を見る。が、二人がこちらを見ていたのびやうとする。

月影 ……な _
緋炎 ……ああ。
青十郎 バカ者 _! 俺は今、蚊がうつうつとくたな _!
月影 うつうつとくた _
青十郎 叩いて殺そうとしてた、追つたら蚊がそちに飛んで行つたぞ、そこらつわけだ _
緋炎 兄者、蚊だつて。
月影 ふん。
緋炎 ふん。
月影 せーの、
月・緋 ふん。
青十郎 合わせるな _!
月影 まあいいやならか。青十郎も男つて _!

青十郎 だから俺は…… _!

笑つていた月影、怒つていた青十郎、次第に真顔になる。

月影 ……そろそろ頃合いか _
青十郎 そうだな。やはり貴様も同じことを思つてたか。
月影 緋炎のように信じ過ぎるのも考えものだがな、あの区役は少しおかしい。
緋炎 なんだよ _
青十郎 俺はこゝらで腰を張るとしよう。
月影 俺は姫さんの傍にいる。
青十郎 本来なら貴様のよつな身分の者が姫の傍にいる _! なんだ、
月影 分かつた、分かつた。こゝは こゝ、互いの役目をきちんと果たさう。緋炎、お前もこゝちに来い。
青十郎 姫は任せだからな。
月影 ああ。

月影と緋炎、上手く去つていく。暗転。

青十郎、赤い布団を袖から受け取り、舞台の真ん中で横になる。

暗転の中、虫の音。時間が経過したことを示す。照明、ゆつくりと夜の明かりに切り替へ。

舞台上には赤い布団をかぶった青十郎だけ。
上手から衣伏が入ってくる。セーターまで来て布団を見下ろす。
何か考え事をしてる様子。やがて小刀を取り出し、構えるが動かない。

青十郎 暗殺するのは迅速かつ正確にやらなくちゃならないのか。

その声に驚き距離をとって構える衣伏。赤い布団をどかし、立ち上がる青十郎。

青十郎 何か怪しいと思っただら案の定……うつつが。貴様、どこの国の者だ。

衣伏、黙っている。

青十郎 女を殺すのは主義に反する。しかし、姫を狙い、この国の秘密まで知ってしまったんだ。それなりの覚悟はしてもらおうか。

衣伏が再度構える。

青十郎 主義に反すると言っただろう。だがそれでも来るというのなら……俺も死ぬわけにはいかないのでな。

青十郎、刀を抜く。衣伏、小刀で青十郎に斬りかかる。青十郎と衣伏の殺陣（30秒程度）。
最終的には青十郎が袈裟斬りをすし止め。

青十郎 くの一でわけでもなさそうだな、攻撃が雑すぎる。……どこの国の人間だ。

衣伏 私はどこの国の人間でもない。

青十郎 どこの国の人間でもない……なのになぜ姫を殺そうとした。お前、その話を聞いてなかったのか。それとも信じられなかったか。

衣伏 聞いていた。……いや、知っていた。

青十郎 知っていた。

衣伏 だからこそ。姫を殺し地獄門を開け、世界中の人間を滅ぼす。

青十郎 貴様……何者だ。

衣伏 私は……。

斬り合いの音を聞きつけ全員が上手から入ってくる。

月影 どうした青十郎。斬り合いの音が聞こえたが……。

衣伏 綾姫「覚悟」。

衣伏、綾姫の姿を見た瞬間、青十郎の刀を逃れ、小刀を構えて突進する。
が、その前に月影が立ちふさがり、一閃で衣伏を退かせる。
ひざまずく衣伏。月影、切先を衣伏に向けて動けなくする。

青十郎 貴様、姫に何の恨みがある。
衣伏 綾姫個人に恨みはない。……いや、これは恨みではない。……これは救いなのだ。
青十郎 救い？世界中の人間を滅ぼすのが救いだというのが。
月影 世界中の人間を滅ぼすって……アゝ々気は確かか。
衣伏 確かなもんか。狂ってるぞ、とくに。
青十郎 とりあえず明日の朝 二に移動して城へ連れていく。と日頃どかかあるが、明日には姫は岩の中へ入られる。岩の前でなら貴様でも守れるだろう。
緋炎 俺もいるよ。長からはすぐ帰って来いって言われてないし。
青十郎 ま、コヤッ 一人よりマシだろうな。楓殿、城へ着いたら代わりのお付け役と共に戻ってきます。それまでしばらくこのままで。
楓 私はいつまでも構いませんけど。
青十郎 助かります。
月影 じゃ、とりあえずコヤッさん縛っておくか。

41

楓、衣伏から小刀を奪う。
地響きのような音。全員、辺りを警戒する。

青十郎 何だこのまわりつくような空気は。
緋炎 押しつぶされそうだし。
楓 姫様。
綾姫 大丈夫です。それより恐ろしい何かが近づいています。これは……人？それともあやかし？
月影 青十郎、緋炎、三人で姫さんを囲むんだ。

三人、バッと動いて、姫、楓、衣伏を背中で守る。ゆづくりと田を描きながら動く。
地響きの音、さらに大きくなる。

月・青 来るぞ。

下手より紅葉が走って月影達を一閃。激しい爆音とともに弾き飛ばされる全員(衣伏以外)
全員を見下ろす紅葉。寄り添う衣伏。

42

月影 ……何なんだア、女は？
紅葉 綾姫は？

衣伏、綾姫を指差す。刀を持って綾姫に歩み寄る紅葉。

月影 姫さんに何するつもりだ？

月影、紅葉を攻撃するが簡単に受けられ、飛ばされる。

綾姫 月影？
緋炎 兄者？
青十郎 姫には指一本触れさせん？

青十郎、紅葉の前に立ちふさがり、攻撃を仕掛ける。が、同じように簡単に受けられ飛ばされる。
紅葉、ゆつくり姫に歩み寄る。両手を広げて立ちはだかる楓。

楓 あなたがどなたが存じませんが、お引き取りを。
紅葉 綾姫。あなたに恨みはないが、人々を救うためだ。死んでもらう。

楓 人々を救う？姫様は守っているのですよ？
紅葉 いざ、覚悟……。

紅葉、刀を構え、振ると同時に緋炎が楓と綾姫を押して避けさせる。
楓、小刀を落とす。それを拾う衣伏。
移動し、月影・青十郎のもとへ。5人がまとまる。
紅葉、ゆつくり振り返り再び前へ出る。月影と青十郎、二人揃って前へ出て刀を構える。

紅葉 ……どけ。……邪魔だ、どけ。
月影 どけと言われて素直にどけ訳ないだろ。

月影、斬りかかるが避けられてしまう。体勢を整え構えなおす。月影・青十郎で挟み打ち。

青十郎 本来であればこのような多勢に無勢、納得いくところではなうんだがな。
月影 言ってる場合か？真面目も大概にして？
青十郎 分かっている。コイツは強い。悔しいが俺一人では歯が立たん。
月影 いけるか？
青十郎 おお？

月影・青十郎、紅葉に斬りかかる。しかし逆に少しずつダメージを受ける二人。
途中、「破壊の力」の攻撃を受ける月影。月影、弾を飛ばされる。
綾姫・楓・緋炎、心配する声。

月影 何だコイツ。妙な技を使つぞ。
青十郎 あやかしか、
紅葉 貴様等の知ることはない。……衣伏、綾姫を殺せ。

衣伏、少し考えた後、小刀を構える。相対する緋炎。

月影 緋炎、
緋炎 二つちは大丈夫、これでも少しは強くなったんだ、

衣伏と緋炎の睨み合い。青十郎、気合の声をあげて紅葉に攻撃を仕掛ける。
殺陣の中、青十郎の刀が大きく弾かれる。スギができる青十郎。

月影 青十郎、

月影、紅葉に攻撃を仕掛ける。受ける紅葉。その間に体勢を立て直し、攻撃に参加する。
しかし、少しずつダメージを受け、二人、最後に「破壊の力」を受けてしまう。
上半身だけ起こして、紅葉を止めようとする。紅葉、綾姫に近付こうとする。
衣伏と緋炎は互いに攻撃し合っている。月影と青十郎、必死に体を起こし、紅葉にしがみつく。

月影 楓殿、姫さんを岩の中、
綾姫 月影、青十郎、
青十郎 岩の中なら安全です、そこして下さう、
綾姫 でも、
月影 早く岩の中、
紅葉 貴様等、どこまで邪魔すれば気が済むのだ、

紅葉「破壊の力」を解放する。飛ばされそこになる二人。

楓 姫様、早く岩の中、
綾姫 でも月影と青十郎が、
楓 お二人は姫の為に命をかけているのです、二人のことを思つたら早く、

月影 姫さん、行ってくれ。..
 青十郎 行ってください。..もつ持ちそこにもりません。..
 紅葉 どうけ……どけー。..
 楓 姫様。..

楓、強引に姫を突き飛ばし岩の中へ入れる。大きな音を立てて閉まる岩。全員止まる。静寂。崩れ落ちる月影と青十郎。

緋炎 兄者。……貴様。..

緋炎、紅葉に斬りかかるが、避けられ「破壊の力」を受ける。飛ばされてぐったりする緋炎。

月影 緋炎。..

紅葉、目の前の岩を見上げる。上段に構え一閃。岩は崩れない。

紅葉 さすがに「破壊の力」を持ってしてもこの岩は斬れんか……。貴様等、なぜ我の邪魔をした。
 青十郎 なぜだと。主君を守るのは武士として当然だろ。..

紅葉 綾姫が死ぬば地獄門が開く。そうすれば人々は救われるのだぞ。
 月影 だからどうしてそうなるんだよ。..悪霊にとり憑かれて死ぬだけだろが。..
 紅葉 多くの弱き者にとってはその方がいいだ。..弱き者にとってこの世は地獄。死ぬ。..こそ救いとなる。……岩が開かれた以上、³⁰ 日待たねばならん。貴様等だけでも先に救ってやるか。

紅葉、刀を構えなおそうとする。

衣伏 紅葉。……いじやないか。この世は地獄。死こそ救い。邪魔をしたコイツ等にはもつ少し地獄を味わってもらおう。

紅葉、その言葉に無言で刀を戻す。

紅葉 我は³⁰ 日後に来る。貴様等は消えておけ。……衣伏。

紅葉と衣伏、寄り添つようにして下手に去っていく。全員ゼンターク。

月影 楓殿、ありがとつございしました。おかげで姫さんを助けることができました。
 楓 それより月影様や青十郎様の方が。

青十郎 俺は大丈夫です。……そっちは？

月影 緋炎。

緋炎 俺も大丈夫……って言いたんだけど、ちょっと無理。しばらく動けそうにならな。

月影 まあ命があっただけマシだろ。

青十郎 貴様、なぜ余力を残した？

月影 何だと？

青十郎 あんな 一大事の時になぜ「鬼の力」を解放しなかった。貴様の役目はそつらつに……だろ？ その鉢巻を取って鬼の力をさへ解放してれば、あるわ。

緋炎 勝手なこと言つなよ。鬼の力を解放し続ければ、兄者は本物の鬼になっちまうんだ。おいそれと鉢巻は取れないんだよ。

青十郎 その為の貴様だろ？

月影 余力を残したのはお互い様だろ？ その刀は飾りか？

青十郎 これは……

楓 月影様、代償があるのは青十郎様も一緒です。この刀は三葉家に伝わる「血吸丸」。主の血を吸って力にし、全てのものを切り裂く妖刀なのです。使用すればするほど刀に血を吸われ、最後には命を落としてしまいます。

月影 その為のアイツだろ？ ……鬼の力も妖刀も使わなければ何の役にも立ちはしな。……。

静寂

青十郎 あれだけ偉そつに忠誠の講釈を垂れておきながら、結局俺は自分の命を優先したのか…。

月影 俺も同じだ。覚悟を口にしたが、この手が鉢巻を取ることはなかった。

青十郎 俺は……。

月影 俺達は、

月・青 弱い。

楓 何べ力な……っててるんですが、お二人が弱かったら他の人達は……なるんです？ お二人は弱いんじゃないやありません。危機に甘んじます。

月影 危機に甘んじます。

楓 お二人は強いです。今まで誰にも負けたことがないと思います。ですから、自分より強い相手に遭遇したことがないんです。つまり、危機を危機と認識する判断基準が甘ら……なんです。それとも何ですか？ 今また、同じようなことが起ったとして、それでも鉢巻をとりませんか？ 刀を抜きませんか？

月・青 そんなはずないだろ？

楓 お二人は強いです。ですが、相手がもっと強っただけです。

月影 力が欲しい。このままでは守れなら、力がなければ守りたいものが守れなら、力が欲しい。強くなるための力が欲しい。力が欲しい……。

静寂。下を向いていた青十郎、意を決したように前を向く。

青十郎 ……月影、

月影、青十郎の方を向く。

青十郎 俺の知ってる剣術をすべて教えてやる、……お前の知ってる剣術をすべて教えてくれ。

月影 青十郎……。

青十郎 力を望むという事は避ける気はならんだろ、³⁰ 日後には再び奴と刀を交えることになる。⁵¹
それぞれがそれぞれの方法で腕を磨いても劇的な変化は望めまい。

月影 いらぬか、身分の低い忍から教わることになるんだぞ、

青十郎 同じ相手に2度も負けるよりはマシだ。

月影 ³⁰ 口はかなう。手加減はできぬが、

青十郎 気が合つた。同じ事を言わつて思っていた。

月影 じゃあ早速始めよう。

月・青 特訓だ、

特訓をしつつ日々が流れるエピソード。音楽。

二人、最後に上段で刀を合わせてエピソードアウト。緋炎が二人に手拭しを持ってくる。

緋炎 お疲れ様です。

月影 おう、ありがとう。

青十郎 気持ちいいな。疲れが取れる。

緋炎 ねえ、兄者、俺も特訓に混ぜてくれよ。

月影 お前には忍の課題を出しているだろ。

緋炎 そつらつんじゃなくて、俺も侍の技術を学びたいんだ。俺だって強くなつて二人の役に立ちたい、

青十郎 ……緋炎。お前忍の修業を始めてどのくらいになる、

緋炎 6年です。

青十郎 忍の技は6年で全て学べるものなのか、

緋炎 長は才能のあるものでも¹⁰ 年かかっています。

青十郎 仮にお前に才能があつたとしても4年足りないうけだ。

緋炎 ですが、

青十郎 忍の技を学んで分かった。忍の技は相手を殺すことに特化した素晴らしいものだ。侍の技術も劣らず素晴らしいものだが、下地があるならまずは忍の技を全て体得し、使いこなせるものになるべきだと思つた、

緋炎　でもそれだと何年後になるか、俺は今役に立ちたいんです。

月影　お前がそう思って俺達の背中を見ているだけで充分役に立っている。

緋炎　俺を子供扱いしないでくれ。

月影　子供扱いしてるわけじゃない。

青十郎　俺達は託しているんだ。

緋炎　託してる？

月影　俺達にもしもの事があつたら、緋炎、お前が何とかするんだ。今すぐじゃなくてもいい。何年かかっても必ず俺達の仇をとってくれ。

緋炎　何年かかってもいい、それまでに人間が滅んでいたら？

月影　大丈夫。人は、そんなに弱くならない。

青十郎　分かったな？お前は自分の速さで成長すればいいんだ。

緋炎　……はい……。……。ん？

月影　どうした？

緋炎　いや、今……。何でもない。じゃ、俺は向こうで修行してくる。

月影　ああ。

緋炎、何かを運つように下へ去る。緋炎が去るのを見送る二人。月影、青十郎を見る。

青十郎　何だ？

月影　いや、いーと言つてもんだと思つてな。兄貴分の俺より兄貴らしい。

青十郎　……こう見えても五人兄弟の長男だ。

月影　それは初耳だな。

青十郎　初めて口にした。

月影　そうか、五人兄弟が……。

青十郎　何か言ひたそうだな。

月影　別に。ただ、

月・青　一人息子のひがなを替わの方がどうとくる

青十郎　とでも言ひたそうだな。

月影　……よくわかつてるじゃないか。

青十郎　貴様と話していると調子が狂つ。

月影　腹減つたな。楓殿に何か作ってもらおう。

青十郎　そうだな。

月影　じゃ、行くか。

青十郎　待て。

月影　ん？

青十郎

飯は手を洗ってからだ。

月影

……ア、アタは真面目だねえ……。

二人、上手へ去る。衣伏、下手より入ってくる。周りを気にしながら上手へ移動。
衣伏が去り終わってから後を追いかけるように緋炎が入ってくる。

緋炎

ア、ア……何でこんな所にいるんだ。

緋炎、衣伏の後を追い、上手へ。衣伏、上手から下手へ。続いて緋炎が上手から入ってくる。

緋炎

このまま上手へ行けばあの男の居場所が分かるかも……。

下手へ行こうとした時、衣伏が現れる。

衣伏

ここまでついて来てしまったの……。気付かなかった私にも責任はある。見逃してあげるから早く
帰りなさい。

緋炎

見逃す？ 俺だつてア、アタぐらゐなら倒せるんだ。

衣伏

私はね。でも、もうすぐあの人がここへ来てしまう。

緋炎

あの人？

衣伏

早く帰りなさい。

緋炎

俺は騙されないうぜ、あの男の居場所を知られたくないんだろ。姫様を殺そうとした奴が何で俺
を助けるんだよ。

衣伏

今それを説明してる時間はないんだ。今すぐ帰りなさい。

緋炎

姫様の命を狙ってる奴を目の前にして帰れるわけないだろ。

衣伏

早く……

下手から紅葉の声。

紅葉

衣伏……

下手から紅葉が入ってくる。その周りに影が５、６人。

紅葉

戻ったのが……。ん？ そいつは……。つけられたのか？

緋炎

お前……

紅葉

まだ逃げていなかったのか。明日でもう

緋炎、刀を抜く。

紅葉 そんなに救いが必要か。……お前達。

影達が緋炎を囲む。

緋炎 クッ、負けねえぞ、俺だつて……俺だつて役に立つんだ……

影が二斉に襲い掛かる。刀で受けなんとかやり過ごす緋炎。

しかし、刀を支える度に少しずつ斬られていく緋炎。

片腕を斬られ、足を斬られ、ホロホロになりながらも戦つ。

一呼吸ついて、大声と共に影達を斬りさらして行く。(斬られても影は去らなう)

走り切った先に紅葉がいる。緋炎、ゆづくり刀を振り上げる。

振りおろそうとした時に紅葉、一閃。緋炎を斬る。ひざまづく緋炎。

それでも刀を振り下ろそうとする。紅葉、緋炎の体を蹴り飛ばす。仰向けに倒れる緋炎。

紅葉、近付して止めを刺そうとする。

衣伏 紅葉、……後始末は私がやっておく。

紅葉、衣伏を見て、緋炎を見て、刀を納める。

紅葉 それで、綾姫はまだ封印の間から出てきてないんだな。

衣伏 ええ。

紅葉 やはり明日か……。御苦労だった。

紅葉、影と一緒に下手くさる。衣伏、緋炎に近づく。

緋炎 チク、ムウ……手も足も出なかった……。

衣伏 だから早く帰りをさうして言つたら……

緋炎 俺……。死ぬのかな。

衣伏 今、止血してあげる。でも手当てをしたとしても……分らないね。

緋炎 何だよ。

衣伏 え。

緋炎 アー、そんなに優しいのになんで姫様を殺そうとしたんだよ。

衣伏 人にはね、立場や事情ってのがあつた。

衣伏、簡単な止血をして、緋炎を起す。

衣伏 私にできることなんて限られてるけど… っただけ願いを聞いてあげる。

緋炎 願いを？

衣伏 あるかい？

緋炎 会いたう……。俺……尺者に会いたう……。

衣伏 分かった……。でも、あの場所からずいぶん離れてしまったからね……。頑張るんだよ。

衣伏、緋炎に肩を貸し、上手へ移動。明かり少し暗くなる。

上手から月影と青十郎の緋炎を呼ぶ声。二人、上手から入ってくる。

59

月影 ったく、アイツとこに行っちゃったんだ。

青十郎 怪我などしてならっとういかな。

月影 青十郎が悟ってくれたんだ。無茶なことはしてならうと思っ。

青十郎 だとういが……若さってのは怖いからな。己の力を過信して突っ走ってしまっとうがある。

月影 経験談かい？

青十郎 ああ……貴様にもあるだろ？

月影 ……まあ、な。

青十郎 さて、このままではうちがあかん。俺は回っこの方を見てくる。

青十郎、上手へ去りかける。

月影 待て。……誰か来る。

下手より衣伏と緋炎が入ってくる。

月影 緋炎、！

月影、緋炎に走り寄り、抱き寄せる。座り込む緋炎。ぐったりしている、青十郎も駆け寄る。

緋炎 尺者、心配掛けてゴメン。

月影 お前、どうしたんだい？

緋炎 役に立ちたかったんだ……。少しでも。

月影 アイツに斬られたのが。

緋炎 俺じゃどうしようもなかった……。当り前だよな。……俺は尺者達ほど強くならもんな……。

月影 馬鹿野郎―― お前は才能があるんだよ。俺なんかより強くなるんだよ。――ずつとずつと強くなるん

60

だよ、

緋炎 嬉しいな。兄者がそんなことを言っただけ。

月影 待つてろ、今楓殿を呼んでくる。すぐに手当てしてやるからな。

青十郎 月影、居てやれ。間に合えん。

月影 だが、

青十郎 居てやれ、……貴様も分かっているはずだ。

月影 緋炎……。

緋炎 青十郎様、お願いが。

青十郎 言ってみろ。

緋炎 兄者のことを頼みます。助けてやってください。どうかお願いします。

青十郎 ……俺のできる範囲で返してあげるなら約束してやる。

緋炎 「できる範囲」で、ですか。

青十郎 ああ。

緋炎 なら安心です。……青十郎様の「出来る範囲」は命かけですから。

月影 人の心配している場合かも、お前は、お前は何をしてぼろ、

緋炎 俺の願いは聞いてもらっただけから、もう十分だ……。

緋炎、大きくため息をついて。

緋炎 兄者……心配かけてゴメン。

緋炎 ゆっくり目を閉じる。

月影 緋炎……。

月影、静かに緋炎の名を呼び、優しく髪を撫でてやる。

月影 痛かったら……。苦しかったら、よく頑張ったな。よく頑張った。……お前が俺より先に死ぬな 62
んてな……。馬鹿野郎が……。

青十郎 月影、仮にでも早く叩いてやれ。緋炎は緋炎なりの役目を果たした。俺が姫に掛け合って正統に
は城で叩いてもらっただけにする。

月影 ……いや、気持ちはお前だが、……でいい。緋炎は城にも里にも連れて行かない。自由な、こ
れに任せよう。

青十郎 そっか。

月影 青十郎。

青十郎 何だ。

月影 ありがとう。
青十郎 ……緋炎はいい奴だった。あの明るさに何度も救われた。
月影 俺の自慢の弟だったからな。

月影、緋炎の体を抱き上げ、上手に去っていく。
衣伏、緋炎を見送り、姿が見えなくなると、振り返り、下手く去ることをする。

青十郎 待て。

立ち止まる衣伏。

青十郎 緋炎の願いは死ぬ前に月影と会うことか。
衣伏 ええ。

青十郎 なぜ貴様が、貴様は一体何がしたいんだ。

衣伏 ……私は。

青十郎 暗殺の時も躊躇したり緋炎の願いを叶えてやったり。いい奴なのかと思えば、人間を滅ぼそうとして
いる男の味方だったり、何を考えているのかサッパリ分からん。本来なら、俺は貴様を斬らな
ければならない。だが、貴様に対して刀を向けるのは間違っている気がするな。

衣伏 お前にはわからんぞ。

青十郎 そりや分らないだろ。何も話さなしたら。……悩んでいることとか、貴様、本当はどんなことし
たくなりたいやないのか。

衣伏 私の気持ちなど意味はない。……あの日、あの時から私は紅葉の望みを叶える為だけに存在し
ている。

青十郎 自分の考えも無しに他人の為に生きるのか。操り人形が貴様は。

衣伏 ……苦しまなくていい分、人形の方がマシかもね。

青十郎 そんな考えは死んでも同然だ。

衣伏 そう……その通り。私は死んでものぞ。私は心臓が動いていない。紅葉が魂だけこの肉体に留ま
るよう願ってくれたんだ。

青十郎 何を言って……。

衣伏 弱い立場の人間の話ぞ。方法は間違っているのかもしれないけど、紅葉は今も人々を救いたいと
思っている。お前達には理解できない。絶対に。

青十郎 貴様達は敵だ。姫を狙っているなら相手をせねばならん。だが……このままでは気が入らないの
も事実。教えてくれ。……何があつた、貴様は何を背負っている。

衣伏、しばらく考えた後、語りだす。

衣伏 私達がいた村はね、三葉の国から南に¹⁰ 日ほど行った所にあつた。戦の絶えなう国でね、それに伴い年貢の徴収も厳しかった。当然、民の生活はいつもギリギリ。それでも農地を持っている家は何とかなつたけど、土地を借りてる家はとてもしやないが生きられなかつた。そして、そういう家は少なくなかつた。

青十郎 そんなの死を待つばかりだろ。

衣伏 それを変えてくれたのが紅葉だつた。紅葉も裕福な家に生まれたわけじゃない。でも、食しう人の為に自ら家を出て、新しい村を作つたの。

青十郎 新しい村を⁶。

衣伏 国の目を逃れてね。だから年貢もない。でも生活が楽になつたといつわけじゃない。一から畑を耕さなくてはならなかつたから。

青十郎 村人はどうやって集めたんだ⁶。

衣伏 紅葉が国中を回つて本当に苦しい人々だけに声をかけて集めた。私も声をかけてもらった一人。¹⁰ 組の家族。総勢²⁵ 人が最初の村人だつた。

照明切り替へ。影が下手から入ってくる。

影¹ 紅葉様、ここにちです。

下手から紅葉が入ってくる。

紅葉 紅葉様と呼ぶのはやめて下さいと言つてゐるじゃないですか。私はそんなに大層な人間じゃありません。

影² 何をおつしやします。紅葉様が村を作り、私たちに声をかけてくださらなかつたら、当の昔に死んでたんです。紅葉様は立派なお方です。

紅葉 本当にやめてください。そんな風に思われていたら、私は皆さんどうも接すればいいのが分かりません。

影³ いーえ、紅葉様、そこは慣れてください。

影¹ それよりどうです⁶、この場所。広さ、土質。新しい畑にちよつと良くなりですか⁶。

紅葉 そつですね……問題は水源ですか……。

影² あ、それなら大丈夫です。このちよつと行った先に川がありましたから。

影³ 紅葉様、私が見つけたんですよ、私が¹。

紅葉 へえ。こんな所に川があつたんですか。

影² 手の空いてる時にこのあたりの地図を作つておつて衣伏さんが言つたんです。それで皆でおもつと戻つて回つたら発見したんです。

紅葉 衣伏さんが⁶。

影³ あ、もちろんそんなに遠くに行かぬようについつて注意されました⁶。

紅葉 そっですか……。
影1 で、どうですか紅葉様、ここに新しい畑を、
紅葉 ……そうですね、まだ明日から忙しくなりそうです。

影達 晝か。衣伏も中に入ってくる。

紅葉 衣伏さん。
衣伏 紅葉様、こちらにいらしたんですか。
紅葉 衣伏さんまで、様はやめてくださって言っているのじ。
衣伏 そういうわけにはいきません。村の事で決めたことなんですから。
紅葉 私の知らないうちにそんな話し合いをして……。何だかのけ者にされた気分です。
衣伏 そんな。
紅葉 ……と、いうのは冗談ですが、やはり慣れきったものありません。
影1 紅葉様。じゃ、自分たちは先に戻って明日の準備をしておきますね。
紅葉 私も後で行きます。
影2 いーんです。紅葉様はもうお帰りのしとてきても。
紅葉 え。
影2 さ、行きましょ。

67

影3 え。何。どういうこと。
影2 いーの、アノタは分かんなくても。
影3 何それ、失礼じゃな。
影1 はいはい、行った行った。後で説明しておけるから。

影達 下手くさで行く。途端に気まづくなる二人。

紅葉 ……そういえば。
衣伏 はい。
紅葉 衣伏さんの提案で地図を作ることじ。
衣伏 あ、はい。土地の有効活用の為にも、村の安全の為にも、必要なことだと思っております……。余計なこと
でしたか。
紅葉 いえいえ、素晴らしい提案だと思します。速くまで行くなどの注意も合わせて頂けたものですじ。
衣伏 ところで誰と行くのですか分かりませんか。私達の存在を国に知られるわけにはいきません。
紅葉 そっですね。……衣伏さんはとても聡明な方だ。考えなしに行動してしまつた私は悪い。
衣伏 何をおっしゃいます。私は、私ではとても村を作るなど……。行動はおろか、考えもつきませんで
した。
紅葉 私達は互いの足りないところを補い合えるのかもしれないね。

68

衣伏

そつだと嬉しいですけど。

間。

衣伏

あの、紅葉様。

紅葉

はい。

衣伏

紅葉様は今後、この村をどうしていきだすとお考えですか。

紅葉

どうと言っても困りますね……。人にはそれぞれ器とってものがあると思っています。私の器ではこの村を作るのがまじつぱいです。人の数はもう¹⁰人ほど増えても大丈夫だと思いますが…
…その人たちの生活を守つてければと考えています。

69

衣伏

ずっとこのまま平和に過ごす。

紅葉

それ以上の幸せがあるとは思えませんから。

衣伏

そうですね。……あの、紅葉様、私も微力ながら、そのお手伝いをしたうと思つています。

紅葉

微力だなんて……衣伏さんがいるなら心強いです。どうかこれから力を貸して下さい。

衣伏

はい。

返事後、2人再び気まずくなる。

紅葉

では、私は先に村へ帰つてます。明日の準備をしないよ。

衣伏

そうですね。私も後で寄らせてもらいます。

紅葉、下手く去つていく。

衣伏

それから一年後、私たちは祝言を上げた。

青十郎

夫婦だったのか…。

衣伏

村の人達からも祝福してもらつてね。3年は幸せな日々が続いた。村人の数も³⁰人になつて、やっと安定した生活が送れるようになってきた頃……あの悲劇が起きた。

70

影達と紅葉が入ってくる。

紅葉

衣伏。こんな所にしたのが。

衣伏

もう行くの。

紅葉

相手を待たせるわけにはいかなうからな。

衣伏

でも紅葉。今までこんなことかたでしよ。

影1

そうですね。この村のことはこの国では知られていらないです。なのに村に入りだしてから責任者と
会わせてくれて……。

紅葉 話によると数年前の我々のような状態らしいです。

影2 だから怪しいんですよ。そんな人達がどうやってこの村の正しを知る事ができるって言うんですか。

影3 紅葉様、やめた方がいらいますって。どんな人達なのかもわからないのに。

影1 せつかく今の村の人たちはみんないい人で仲良くやっていますよ。

紅葉 はい。ですから話をしてみても我々と合いませんでしたら村に入ることを断るつもりです。

衣伏 断った場合、腹いせにこの村の正しを国にはらわれるかも。

紅葉 ……そうだな。言う方には気を付ける。なるべく向う側の機嫌を損ねないようにしようとな。

影2 紅葉様がそんなに気を遣うこともないのに。

紅葉 本当に困っている人達かもしれませんよ。明日とていつか、今、食べるものもなく苦しいでいる人達かもしれません。それに、いきなり村に入ってくるのではなく、村の外で会い、話し合いをしようとする姿勢にも好感が持てると思いませんか。

影3 それはそうかもしれませんが……。

紅葉 とにかく、行って話をしてみます。憶測だけでは前へ進みませんから。

衣伏 気をつけて。

紅葉、うなずいて上手く去っていく。

衣伏 指定された場所は村から歩いて3時間ほど離れた山奥。でも、紅葉が到着してもそこには誰もいなかった。

青十郎 ……眠ってたというわけか。

衣伏 村に入りたがと話を持ちかけてきたのは国の使りのものだった。私たちの村の存在が国にはれたの。税を逃れて勝手に村を作ったことに君主は怒った。そして、もともと残酷な方法で罰を与えた。

青十郎 貪欲な君主の考えそのことだな。

衣伏 まず城の兵士が大勢攻めてきて、家と畑を燃やした。そして、行き場をなくした村人が呆然と立ち尽くしている中、一家族につき一人を残し殺していった。

青十郎 皆殺しではなく。

衣伏 言ったでしょう。残酷な罰だった。……ある家族は夫だけが生き残り、ある家族が妻だけが。息子だけが、娘だけが生き残った。そして、兵士は帰って行った。

青十郎 分からん。一人生かすことに何の意味が。

衣伏 住む家を失くし、明日の糧を失くし、家族を失った……。どうやって生き続ける希望を持てばいい。そんな状態で前を向けるほど、人は強くない。だから自ら死のことにする。でも、一つだけ心に引っかかるものがある。……なぜ自分がこんな目に会わなきゃならなかったのか。何で自分だけがこんなに不幸なのか。何で自分だけ苦しまなければならなかったのか。……その原因を作ったのは誰。この村を作ったのは誰。って。

青十郎

まさか？

衣伏

そう、生き残った者は紅葉を恨む。紅葉にも同じ目に合わせようと考え。大切な人を奪われる悲しみを、苦しみを与えてやろうと考える。私は生き残った村人に囲まれ、紅葉が戻ってくる数時間の間、拷問を受け続けた。

影達、衣伏を取り囲み、拷問をかける。殴る蹴るなどの暴力。
音楽。紅葉上手から入ってくる。

紅葉

衣伏！！

紅葉の姿を見た影達は影1だけを残して紅葉の方へ。
大声をあげて迫る影達。紅葉、行く手を遮られる。
グツタリしている衣伏。影1、衣伏に暴力を続ける。

紅葉

衣伏！！ 衣伏！！

前へ進めぬ紅葉。しばらく影と押し合い。体勢を開し、前のめりに倒れる紅葉。
影達に押さえつけられる。暴力を続けていた影1 一旦止める。ゆっくり剣を取り出し刀を抜く。

衣伏、起き上がり、紅葉のもとへ行くこととする。
影1に背中を見せる衣伏。影1、刀を振り上げる。

衣伏

紅葉……。

紅葉

やめろ、やめてくれ、やめてくれ、私が悪かった、悪いのは私だ！！ 全部私が悪いんだ！！ 罰は私が受ける！！ だからやめてくれ！！

影1、刀を振り下ろし、衣伏を斬る。ゆっくり倒れる衣伏。
倒れた衣伏に向かってさらに刀を突くこととする影1。

紅葉

やめてくれ、私がもう一度下手から全部やる、畑も一人で耕す、皆は何もすることない、私一人でやるから、やめてくれ、悪いのは私なんだ、衣伏は、衣伏だけは！！

影1、刀を大きく振り上げる。

紅葉

やめろー！！

影1、刀を衣伏に突き立てる。一度目は大きく。以降、数回、細かく刀を突き立てる。

動かなくなる衣伏。奇声を上げる影一。その声に反応して他の影達も奇声をあげ、紅葉を殴る、蹴るなどして暴力を加える。動かなくなる紅葉。影達、一度大きく雄たけびをあげて下手に去っていく。紅葉、上半身だけ起こして這つように衣伏のもとへ。

紅葉

衣伏……衣伏。

衣伏の体を抱き抱え、つすくまる紅葉。

紅葉

地獄だ……。この世は地獄だ。……人間は弱い。……弱い人間は過ちを繰り返す。……過ちを犯したのは国か、村人か、それとも私なのか……。

紅葉、衣伏の髪を優しく撫でてやるが、その動きを止めて

紅葉

遣う。……我は過ちなど犯していない。人間の罪が重すぎるのだ。今までのようなやり方では人を救えはしない。……この世は地獄。ならば、死なず人間によつての救いとなるだろう。

紅葉、衣伏の体を床に下ろし。

紅葉

力が……力が欲しい。全ての人間を殺し救える力が欲しい。我に力を。我に力を。我に力を。……

爆発音、紅葉、目の前の一点を見つめる。

紅葉

……お前は誰だ、あやかしか、……私の願いを3つ叶えるだと、……3つもいらぬ。2つで十分だ。

紅葉、立ち上がり。

紅葉

我に力を与えてくれ。全てのものを破壊できる、圧倒的な力を。人を辞めても構わぬ。我に絶対的な破壊の力を与えてくれ。

力が集中する音。紅葉、自分の体を確かめる。手こたえを感じたのが、再び前を向く。

紅葉

二つ目の願いだ。衣伏を生き返らせてくれ。

間

紅葉 魂だけ……。構わん。衣伏がこの世に留まれるならどんな方法でもいい。

力が集中する音。ゆっくり立ち上がる衣伏。

紅葉 衣伏、前に誓ったな……。これからも我に力を貸すよ。

衣伏 ええ。

紅葉 私はこれより全ての人間を殺し、救う方法を探す。衣伏にも動いてもらっぞ。

紅葉、衣伏の返事を聞くことなく下手く去る。

明かりが変化する。青十郎と衣伏。

77

青十郎 貴様達の事情は良く分かった。同情の余地は充分にあるだろう。だが、やはりやることとして
いることは間違っている。

衣伏 何が正しくて何が間違っているかは立場によって変わるものじゃないか。

青十郎 貴様の立場はどんなんだ。

衣伏 ……分からない。

青十郎 分からないか。

衣伏 私は紅葉のように全ての人間を救いたしなんて思わない。私は、紅葉が救われてくれればそれで

いい。

青十郎 奴にとつての救いは……せめて人として死なせてやることじゃないのか。

衣伏 私達は仇じゃないの。そのきの男にとつて。

青十郎 話のわからない男じゃない。説得するつもりなら俺達も力を貸してやるか。

衣伏 私達はもう後戻りできない。これまでも人を殺し過ぎた。心はとくに人じゃなくなっている。

青十郎 心が人じゃないというのなら何故そんなに辛そうな顔をする……

衣伏、一瞬何かを考え、言おうとするが止め、下手く去ろうとする。

青十郎 俺は俺の信念を貫く。姫を守る為であり、優しい心を持つが故に狂ってしまった男を救う為にな。⁷⁸

衣伏 話を聞いてもらえて良かった。私の罪の何割かはアノタが背負ったんだ。

青十郎 問題ない。

衣伏 ……私は、私のケジメをつけるつもり。

衣伏、下手く去っていく。照明が切り替わり、朝になる。伸びをする青十郎。大きく溜め息。

青十郎 30 日目が……。

刀の交わる音。反応する青十郎。

青十郎 斬撃の音……。……月影……

青十郎、上手く走り去る。上手から月影が入ってくる。

月影 緋炎……。……なら封印の間も近づき、見晴らしも……。……寂しくなりやな。

月影、大きく溜め息。

月影 なんかことなら、もつとお前と遊んでおけば良かったな。大したことしてやれてならのに、兄者、兄者……。実は結構嬉しかったんだ。……本当の弟だと思ってたんだ……。でも、あいつと刀を交えるのはお前の仇打ちじゃない。お前もあいつと刀を交えたなら分かるだろう。あいつの刀からは怒りや憎しみは感じられなく。感じるのは……。悲しみだけだ。

月影、大きく溜め息。

月影 じゃ、俺は俺のすぐきところがあるから。……大丈夫。覚悟は出来てる。

影達が下手より入ってきて、月影を囲む。

月影 居るべき場所へ帰してやるよ。

月影、刀を抜く。

月影 始めよっか。

影達、襲いかかる。影の刀を避ける月影。まずは守りに徹する。

影を徐々に誘導し、上手へ集める。下手で刀を構え直す月影。影達と相対する。

月影、掛け声とともに上手へ移動。影達を 一気に斬る。斬られた影達は下手へ去っていく。どんよりとしたイメージの効果音。

影達とすれ違いながら紅葉登場。一気に月影に走り寄り攻撃。

かろこして受けるが態勢を崩す。下手く回りにもつとやるが、移動中、左腕を浅く斬られる。腕を押さえる月影。下手く移動するが片膝をつく。

紅葉振り返し、月影に向かって歩く。

青十郎、掛け声とともに刀を振り下ろしながら上手より登場。

数回斬り合いをし、距離をとる青十郎。

青十郎 月影!! 大丈夫か?!

月影 登場が格好良すぎるだろ。見計らってたんじゃないのか?!

青十郎 それだけ軽口がたたければ平気だな。

紅葉 あれだけ力の差を見せつけられて、まだ我の邪魔をするつもりか。

月影 立場や事情、信念があるのはあんただけじゃない。

青十郎 俺達の力は貴様のように何かにすがって手に入れた力ではない。自らの意志と努力で手に入れたものだ。

月影 弱い人間だつてな・・・強くなれるんだよ。変わりたいと願ひ続ければな!!

81

月影・青十郎・紅葉の斬り合い。以前よりは善戦。2撃目、3撃目に耐えられるようになってくる。少し間を置き態勢を整える3人。紅葉、気合しを入れて「破壊の力」発動。再び斬り合い。要所要所で「破壊の力」を使う紅葉。最終的に二人の刀を大きくはじき、青十郎→月影の順で「破壊の力」を使う紅葉。青十郎、大ダメージ。

紅葉をセンターに青十郎は上手。月影は下手くばじき飛ばされる。

紅葉 なるほど……確かに強くなつてはいる……が、その程度で我を止められると思つたか?!

月影 焦るなよ。今からとつておきを見せてやる。

月影、鉢巻きに手をかける。

青十郎 待て月影!! 俺が先に血吸丸を抜く!!

月影 いや、順番的には俺が先だな。

青十郎 俺は血を取られるだけだ!! 代償が少ない!!

月影 戦いが長引いたら分からねえじゃねえか!!

青十郎 覚悟はあると言つたら!!

月影 べか野郎!! 武士の本分を忘れたのか? 青十郎に何かあつたら誰が姫さんを守り続ける?!

紅葉 言い争いはあの世でするんだな。

82

紅葉、青十郎へ斬りかかる。必死に対応するため血吸丸を抜くことができない。

月影 俺に流れる鬼の血よ!! 力を貸しやがれ!!

月影、鉢巻きを取る。力が集中する効果音。

月影、刀を構え直して、掛け声とともに紅葉に斬りかかる。

紅葉、月影の刀を受け止めるが、飛ばされそっになる。

紅葉

この力は？

月影

言ったら、とておきを見せてやるって。

3人の斬り合い。月影と紅葉は互角の力。青十郎のみ少なしながらもダメージを受けていく。青十郎、紅葉から「破壊の力」を受け態勢を崩す。止めを刺されそっになった時、月影が青十郎をかばい、二人、上手く飛ばされる。その際、月影は右腕を斬られる。つめき歯をおげる月影。

青十郎

月影…

月影

大丈夫。少しやすただけだ。

紅葉

さあ、救われるが、い…

紅葉、月影に斬りかかるが、青十郎が前へ出て血吸丸の鞘で攻撃を受け止める。大きく刀を弾き返す青十郎。飛ばされる紅葉。

月影

青十郎…

青十郎

貴様には、かり良し格好させるわけにはいかんだろ。

月影

武士としての役目は…

青十郎

武士としてではない。俺だ……。俺自身が貴様を助けたいと思ってるんだ。

月影

…ア、ア、変わったな。

青十郎

ふざけるな…貴様が…貴様が俺を変えたんだろが…

青十郎、台詞と共に血吸丸を抜く。力が集中する音（少しおそろおそろしう音）。苦痛に顔をゆがめる青十郎。その間に態勢を整える月影。紅葉に斬りかかる。避ける紅葉。月影そのまま下手く。青十郎、上段から振り下ろす。受ける紅葉。弾き返す…とができな。そのスキをついて斬りかかる月影。紅葉、身を半転させてやり過す。月影、上手く。青十郎下手く。斬り合い再開。3人が互いに少しずつダメージを追う。最終的に月影は下手。紅葉はセンター。青十郎は上手。互いに上段を振り下ろす。3つの刀が交わり合う。

青十郎

貴様の信念の貫き方は嫌いではない。裏切られ、大切な人を殺されて尚、人の為と言え、貴様の心根だけは認めよう…

月影

ア、ア、ア、刀からは怒りも憎しみも伝わってこない。感じられるのは深い悲しみだけだ…

青十郎

その悲しみの源は何だ？ 無力さか？ 村人を説得できなかったし、大切な人を守る…とができなかった無力さか？

月影 弱い者にとって死こそ救いと言つてだな。それはアノタ自身が望む、自らくの罰だろつ。...

紅葉 戯れ言を言つな……。弱き者の気持ちちが貴様等に分かるというのか。

月影 皮肉なもんでな。弱き者の気持ちちがアノタが教えてくれたよ。...

青十郎 だからこそ俺達は強くなると思つた。痛みや苦しみを飲みこんで、さらに前へ進もうと思つたのだ。...

月影 死からは何も生まれな。俺達は生きてるんだ。生きてりゃ辛いこと一つや二つあるだろつ、だがな、辛いことだけじゃない。嬉しいことや楽しいことだつていっぱいある。...

青十郎 可能性を潰して前を見なくなつた貴様に俺達に負けるわけがな。...

3人、半周して離れる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。
 相対し、3人再度構える。3人の雄叫び。上手より衣伏登場。
 衣伏、紅葉の背中を見て走り寄り、紅葉を刺す。呆然とする紅葉。

85

衣伏 もう……。もうやめましよう。あなたは間違つています。村人を想ひ、私を大切にしてくれた紅葉に戻つて欲しい。私の願ひはそれだけです。

紅葉 弱き者を身捨てると言つのか。

衣伏 弱き者、強き者、それを決めるのは私達じゃない。分かるでしょ。それを決めるのは私達じゃない。

紅葉 救ひはとつなる。とつすれば人は救われる。自分の力の及ばぬ圧力に対し、とつすれば人は救われる。

衣伏 紅葉……。救ひなんて言葉は幻でしかない。仮にあつたとしても、もつと身近で小さなもの。あなたと笑つて共に生きていければ、それが私の救ひなの。

紅葉 我が死ねば、衣伏も死ぬのだぞ。

衣伏 ええ、ですから……。来世で会いましよう。

紅葉 ……魂だけで生きるのが辛くなつたか。

衣伏 え。

紅葉 あの世へ行き、生まれ変わりを待ち、一刻も早く普通の人間として生きたいと思つたか。

衣伏 違つ。

紅葉 我が死ねば、その願ひが叶つと思つたか。

衣伏 違つ。...

紅葉 この裏切り者が――。...

紅葉、袈裟斬りから横払いで衣伏を斬る。上手前方へ飛ばされて倒れる衣伏。動かなくなる。
 紅葉、衣伏の方へ2・3歩ヨロヨロと歩くが、立ち止まる。

青十郎 貴様。...

86

月影 アゝ々は今、人であることをやめたんだ…
 紅葉、刺された所を押さえてっつ、っただれる。
 耳障りな音。音とともに全身に激痛を受ける月影。月影の叫び声。

青十郎 月影… お前…
 月影 大丈夫。今、鬼になるわけにはいかならんからな。
 紅葉 我は……誰だ。我は何だ。我は……分からない。

紅葉、ゆっくり振り返る。

紅葉 お前達を殺した後でゆっくり考えるところが。
 月・青 ふざけたこと言っでんじゃねえー…

音楽。

青十郎 大切な者を巻き込むだけ巻き込んでおいて、最後はこれが…信念はぶっした…目の前の女…
 人を救えない者が、人々を救うなと大それたことを言った…

月影 救いが必要なのはアゝ々の方だろう…俺達が救ってやる。俺達の覚悟をのけてアゝ々を斬る。
 さあ、ケリをつけようか…

3人、最後の斬り合い。互いにダメージがあるため、うまく動けない。それでも必死に戦う3人。
 月影は鬼の力の痛みを耐えて。
 青十郎は血吸丸からの呪いに耐えて。
 紅葉は衣伏に負わされた傷をかばいながら。
 途中、二手に分かれる。上手に紅葉。下手に月影と青十郎。
 紅葉、傷を押さえて動けない。月影、痛みを耐えてっつ、青十郎を見る。片膝をつく青十郎。

月影 青十郎… 血吸丸を離せ…
 青十郎 やかまし…余計なお世話だ…

心配する月影の体を使いながら、自らの力で立ち上がる青十郎。

青十郎 それより、いいか。このままじゃ勝ち負けは五分五分だ。俺がアイツの隙を作る。お前はその好機を逃さず斬れ。

月影 駄目だ、危険すぎる…その役なら俺が…

青十郎 身分の低し忍のくせして武士に意気するな……と、以前の俺なら言っていたんだろうな。

台詞終わりと同時に飛び出す青十郎。

月影 青十郎……

月影、痛みに片膝をつく。青十郎と紅葉、数回斬り合った後、鎧迫り合い。

そのまま立ち位置を逆に回り込む。

紅葉、上段に構え、振り下ろす。青十郎、血吸丸を離し、紅葉に斬られる。と、同時に紅葉の両腕を掴む。

青十郎 今だ月影……

紅葉 離せ……

紅葉、「破壊の力」を解放。飛ばれそうになる青十郎。

青十郎 月影……

月影、立ち上がり紅葉を2回斬る。青十郎腕を離す。

振り返る紅葉。月影、最後にもう一度紅葉を斬る。センターで倒れる紅葉。

月影、よろめいて下手で座り込む。青十郎、這つてよつとして血吸丸を拾い、鞘に納め立ち上がり月影の元へ。

月影 終わったな。

青十郎 ああ……。……これは……

青十郎、鉢巻きを手にする。

月影 残念ながら間に合いません。

青十郎 ……そうか……。

月影 ああ。

青十郎 俺の田舎は……三葉の国から北ぐら日頃と行った所にある。寂れた村だが山が多くて景色のいい所だ。

月影 ……ぐへ。

青十郎 鍋がつかなくてな……。今度、一緒に食おう。

月影 鬼を受け入れてくれる村だっけ……。うん。うんにする……

青十郎 ……お前は真面目だな。男との約束なんて「今度は」でいいんだ。

月影 ……違ひない。……じゃ、今度は。

青十郎 月影。

月影 ん？

音楽。

青十郎 一つ頼まれ事をしてくれなうか。

月影 ……何だ？

青十郎 これを……姫に、三葉家に返しておいてくれなうか。

月影 そんなのアイヌが……。分かった。全く、世話のやける男だな。

青十郎 すまない。

月影 で、アイヌはいつするんだ。

青十郎 俺は少し、暇をもらつて。……最近、働いてくめだったからな。……ううと体を休めんとしたん。

月影 そつだな。ゆつくり休むという。

月影、体の痛みに耐える。

青十郎 ……行つてくれ。貴様が鬼になるところなう見たくもない。

月影 ああ……。

月影、下手く去りかけて、立ち止まり

月影 青十郎。

青十郎 何だ。

月影 いろいろあつたが、楽しかったな。

青十郎 ああ、それだけは確かだ。

月影、下手く去つていく。青十郎、その背中を見届ける。

最後の力を振り絞つて立ち上がり、前を向く。

青十郎 武士とは使命を全つする為に生きる者なり。……男とは信念を貫く為に生きる者なり。……短くはあつたが良し人生だった。万感の思いを胸に築つてゆ……。

青十郎、台詞の後、力尽きて倒れる。

照明が変わる。紅葉、上半身だけゆつくり起き上がる。

這つて衣伏の元へ。衣伏の頭を抱え、抱きしめる。

紅葉 ……すまなかつた。間違つてしたのは私だ。随分長い間、辛し思ひをさせてしまつたな……。すまなかつた。

紅葉、前を向いて

紅葉 3つの願ひを叶えるあやかしよ。やはり3つ目の願ひをさせてくれ。私は……来世でももう一度あなたに会いたう。今度こそ、今度こそ必ず幸せにするから。衣伏……あの世でもあなたも同じように願ひしてくれるだろうか。

紅葉、衣伏を抱えたまま力尽きる。

中幕が開き、綾姫が出てくる。上手から楓。

楓 姫様…
綾姫 楓、他の者は？
楓 緋炎様がお亡くなりになつた。
綾姫 緋炎が？

楓 今、青十郎様と月影様があの方と戦つております。
綾姫 私の力は門を封じる、じつしか出来ないのでしょつか。私は守つてもらつて、じつしか出来ないのでしょつか。
楓 そのようなことをお考えになれる姫様だからこそ、あの方には命をかける、じつしか出来るのです。姫様は姫様のままでいい。私はそのように思ひます。

鬼になつた月影が血吸丸を持って下手から入ってくる。

楓 あやかしです… 姫様… お氣をつけてください…

楓、綾姫の前に出て盾となる。月影、ゆっくり近付く。

綾姫 楓、待ちなさい。

綾姫、楓と並ぶように前へ出る。

楓 姫様、危のつしやいます…
綾姫 あれは……血吸丸では？

楓

えっ……ああ…

月影、相手が極力弱からなれどもつに近付く。月影、綾姫に刀を渡す。

楓

……に血吸丸があるという事は、青十郎様は…

綾姫

青十郎……。

綾姫、血吸丸を強く抱きしめる。戻屈けた月影、振り返り、下手くさなことをする。
 へつとした表情を浮かべ、月影を見る綾姫。

綾姫

月影…

月影、立ち止まる。

綾姫

……月影なのでもっ…

綾姫、一歩前へ出る。と、同時に一歩下がる月影。

綾姫

月影……。

月影、ゆつくり三葉家家臣の忠誠の姿勢を取る。

綾姫

ありがとう。月影。青十郎。私はあなた達のことを子孫、その先の者へと代々語り続けてしま
 しょう。あなた達の想い・信念はきつと多くの者たちが引き継ぐはずです。闇夜を照らす唯一の
 光。月光のような信念を。

全量スリッパでーい。

親子の台詞(重)が入った後で照明、徐々に暗くなる(暗転ではなく薄明かり)。

母

これでこの物語はおしまひ。

娘

えっ、これでおしまひなの…

母

だから少し悲しむ話つて言ったでしょ…

娘

悲し過ぎるよ。ねえ、お話なんだから、死んじゃった人とか、鬼になっちゃった人とか、皆生き返ら
 せちゃえばいいじゃない…

母

ダメ。受け継いできた話を勝手に変えるわけにはいかならでしょ…

娘

え…

母
娘
母
娘
母
娘
2人

それにね、この物語はおしまひだけ、ずーっと先の世界では幸せになつたんだって。
ずーっと先の世界。
言つたでしょ、死んでもの世に行つちやっても、生まれ変わりでもあるんだって。だから、その生
まれ変わった世界で。
幸せになれたの。
長い時間を必要としたけどね。
じゃあ、最後の言葉はもちろん……。
めでだし、めでだし。

音楽。
明かりがつく。舞台上の全響が立ち上がる。袖にける影も全響出してくる。
それぞれが楽しそこに楽しむ。

— 幕 —